

▼モト・グッツィについて —優れたGTモデル製造の系譜—

約1世紀も前に発生した第1次世界大戦は、未曾有の惨禍をヨーロッパにもたらしましたが、その状況下においても夢を暖め続け、実現させた若き男達がありました。徴兵されたイタリア空軍で偶然に出会ったオートバイ好きの3人の若者達が立ち上げたメーカーが“モト・グッツィ”なのです。1921年の創業より間もなく、イタリア空軍の紋章“AQUILA”(アクイラ=鷲の意=ローマ帝国に遡る由緒あるエンブレム)を会社のロゴマークに載せています。これは、3人の内の1人で会社設立前に航空機事故で亡くなった、戦前の著名なレーシングライダー“ジョバンニ・ラベリ”を含めた3人で立ち上げた会社である事のシンボルトとして、出会いの場であったイタリア空軍の紋章をモチーフにしたと伝えられています。



中央の写真の右側が創業者の一人で技術面の中核をになった“カルロ・グッツィ”です。他の2枚は往年のモト・グッツィのファクトリーチームの写真で、もう一人の創業者“ジョルジオ・パローディ”(主に資金面を担当)の発案で、宣伝活動の一環として創業直後よりレース活動に熱心に取り組み、初陣の1921年“タルガ・フローリオ”で優勝、そして1957年の最終シーズンまでモーターサイクル発展の牽引役となって大活躍しました。中でも、1934年のマン島TTでは、当時絶頂期のイギリスメーカーに対し、イタリア人ライダー“オモボノ・テンニ”により優勝し、初のイギリス製以外のマシンによるマン島TT勝利という栄冠を、初のイギリス人以外のライダーが達成するという歴史に残る快挙を、モト・グッツィが成し遂げたのです。この事件は、第2次大戦前夜で地中海の覇権を賭けて“大英帝国”と対立していたイタリアにとっては、またとない吉報であり、当時のイタリア人達の歓喜は、今の日本人にはちょっと想像が付かないのではないのでしょうか。1957年までに、彼らは14回のワールドタイトル獲得と11回のTT優勝を成し遂げています。

意外にも、創業者の“カルロ・グッツィ”自身はレース活動にそれ程熱心ではなく、当時未熟であったモーターサイクルの公道走破能力や耐久性の向上の為に、色々なアイデアを考案し、それを実現する事にその情熱を注ぎ、1928年の初代GTノルジェ(恐らく史上初のリアサスペンション装備の量産モーターサイクル)を始め、数々の優秀なGT(グランツーリスモ)モデルの開発に心血を注いだのです。これが、モト・グッツィ本来の量産車の開発哲学と言えるでしょう。第2次大戦後のレーサーマシン設計は、“カルロ・グッツィ”自身よりその愛弟子の“ジュリオ・チェザーレ・カルカーノ”に任せていた様ですが、DOHC V8 500CCの究極のGPレーサーとして名高い“オットー・チリンドリ”の設計者でもあるその彼が、まさに現在のVツインエンジンの生みの親なのです。

創業から85年となる今年は、原点回帰で創業期より彼らの得意とした優美なGTモデルの充実を柱として、新たな発展への基礎固めの年です。登場が長らく待たれていた“グリーンズ”、正統派GTモデルの系譜を受け継ぐ“ノルジェ1200GT”そして往年のポリスモデルのレプリカ“ヴァンテージ”等個性的なデザインのモデルが目白押しとなります。